



# A・F・Tジャーナル

文部科学省認可(社)全国服飾教育者連合会(A・F・T)

■ホームページ [www.aft.or.jp](http://www.aft.or.jp)

●東京事務所 〒100-0011 東京都千代田区千代田1-1-1 帝国ホテルタワーF ●大阪事務所 〒530-0001 大阪府北区梅田2-2-2 ヒルトンプラザウエストオフィスタワー16F ●ニューヨーク事務所 ニューヨーク市マジソン街295番42F

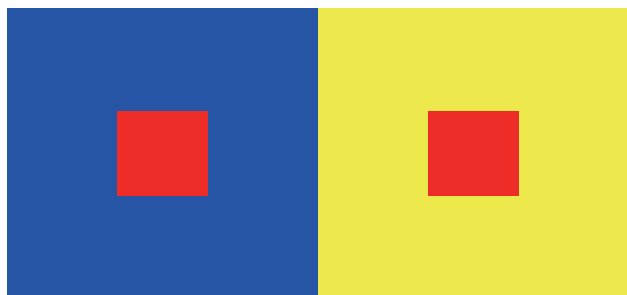


図1:色の対比あるいは色相の対比  
ある領域が他の色領域に囲ま  
れると、後者の反対色が前者に誘  
導される現象。この図では、左の  
赤い正方形には黄色が誘導され  
てオレンジがかって見え、右の赤  
い正方形には青色が誘導されて  
マゼンタがかって見える。

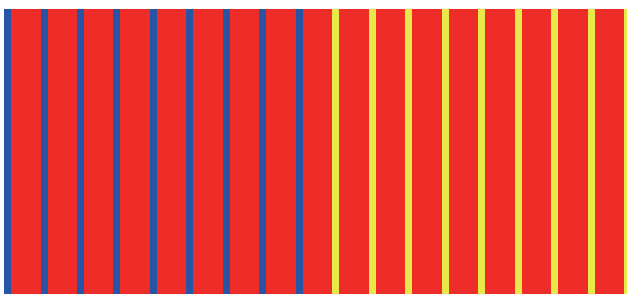


図2:色の同化あるいは色相の同化  
ある領域上に色の付いた細い  
線を乗せると、後者の色が前者  
に誘導される現象。この図では、  
左半分の赤い背景には青色が  
誘導されてマゼンタがかって見  
え、右半分の赤い背景には黄色  
が誘導されてオレンジがかって  
見える。



図3:彩度対比  
ある領域が同じ色相で彩度の  
より高い領域に囲まると彩度  
が低く見え、逆にある領域が同  
じ色相で彩度のより低い領域に  
囲まると彩度が高く見える現  
象。この図では、左右の小さい  
正方形は同じ色であるが、右の  
正方形は左の正方形よりも彩度  
が高く見える。

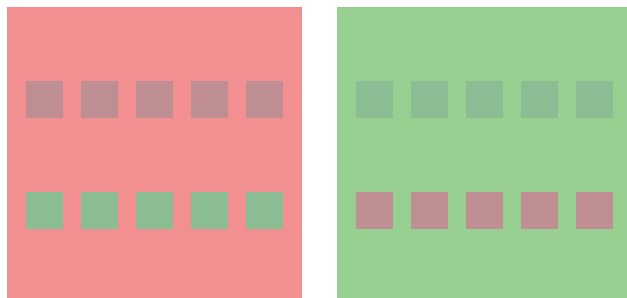


図4:酒井の色対比  
見えの説明は本文参照。立命  
館大学の心理学専攻生の卒業  
研究(2002年度)における成果  
の一部を筆者が改変して構成し  
た錯視図形である。

それはさておき、最近の錯視研究全体の活  
発化の影響で、今や色の錯視は上記の3種類  
ではすまなくなってきた。新しい錯視の  
例を3つ挙げよう。

1つ目は、「酒井の色対比」である。図4で  
は、左図の上の列の5つの正方形は灰色に見  
えるが、実際には右図の下の列の赤味を帯び  
た正方形と同じ色である。また、右図の上の  
列の5つの正方形も灰色に見えるが、左図の  
下の列の緑味を帯びた正方形と同じ色であ  
る。この錯視では、色のついた図形が無彩色  
に見えるのだから彩度対比であるとも言え  
るし、打ち消しの誘導色は補色であることから  
色相の対比とも言える。

一方、この錯視は色の恒常性によるもの  
という可能性もある。色の恒常性とは照明の色  
味にかかわらず、対象の色はある程度一定に  
見える傾向のことである。たとえば、灰色の  
紙片にやや赤味を帯びた光を当てて、実際に  
は反射光が見えるというところが、色の恒常  
性である。色の恒常性と錯視の関係はこれま  
であまり検討されてこなかったため、今後新  
たな発見がある可能性がある。

北岡 明佳

立命館大学/文学部教授知覚心理学

## 増え続ける 色の錯視

色の錯視を勉強しようとする、芸術か心  
理学の教科書をひも解くことになる。そうす  
ると、色の錯視としては、色の対比(図1)と色  
の同化(図2)くらいしか記述されていないこ  
とに気づく。それらに彩度対比(図3)などを  
加えても、色の錯視は数種類であるかのよう  
に書かれていることが多い。

もちろん、ベンハムのコマや進出色・後退色  
といった他の色彩現象も錯視の仲間に入れて  
しまえばもつとにぎやかになるのだが、そもそ  
も対比・同化という名称ひとつを取ってみても、  
色における錯視的な現象を錯視と呼ぶこ  
とは好まれてこなかったことがわかる。その  
理由を推察すると、色の知覚そのものが(本来  
物質に備わったものでない性質の知覚とい  
う点で)錯覚的であると考えられてきたから、と  
いう可能性が指摘できる。

# 32 Autumn 2006 vol.

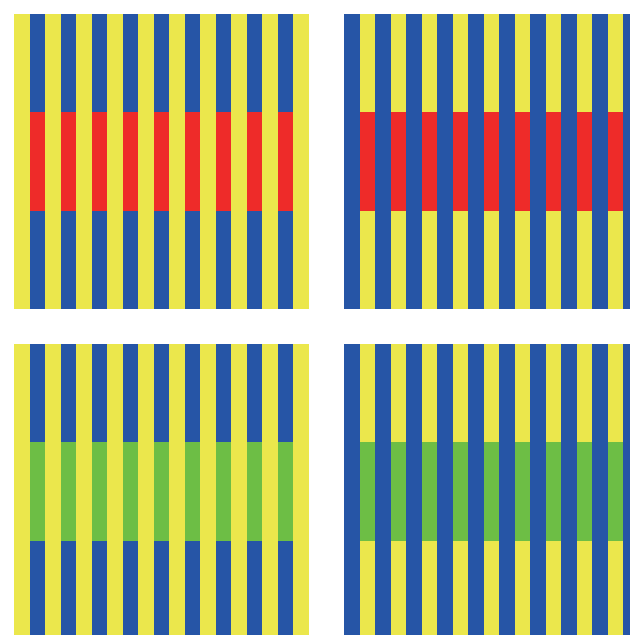


図5:ムンカー錯視  
上の列では、同じ赤の  
縞模様がオレンジ色  
(左)とマゼンタ色(右)  
に見える。下の列では、  
同じ緑の縞模様が黄緑  
色(左)とシアン色(右)  
に見える。

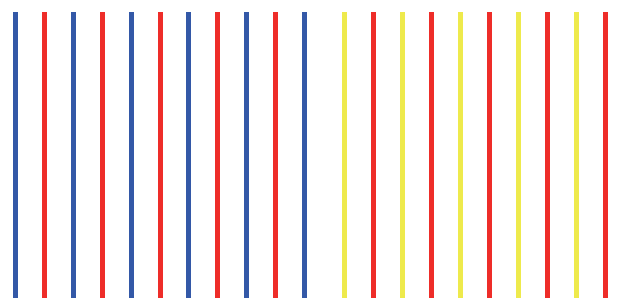


図6:遠隔色対比  
色の対比は少し離れた  
ところからの効果が  
大きい、というデモン  
ストレーションである。  
左右の図で赤線は同  
じ色であるが、左の  
図ではオレンジが  
かって見え、右の  
図ではマゼンタに  
近い色に見える。

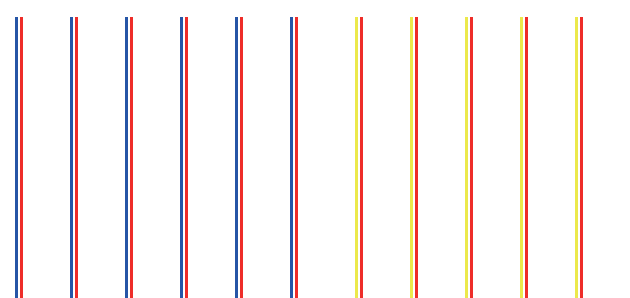


図7:遠隔色同化  
色の同化は誘導刺激  
同士が接していなく  
ても起こる、という  
デモンストレーシ  
ョンである。左右の  
図で赤線は同じ色  
であるが、左の図  
ではマゼンタに  
近い色に見える、  
右の図ではオレンジ  
がかって見える。

であり新しいのではないのであるが、なぜか研究  
者の間でもよく知られておらず、今でも新し  
い錯視として報告されているのを見かける。

3つ目は、遠隔色対比である(図6)。色の  
対比は少し離れたところからの効果が大き  
い、あるいは誘導領域と被誘導領域が接触し  
ていない必要はない、ということを示す錯視で  
ある。前者については、おそろく定量的デー  
タはなく、後者については、側抑制説という広  
く受け入れられている色の対比の学説と矛  
盾する。遠隔色対比はみかけは新しいが、実  
は古い文献にそれらしい記述が認められる。

なお色の線同士がさらに接近しているとい  
う色の同化が観察できる(遠隔色同化)(図7)。  
この錯視を並置混色の一種と考える人もい  
るのであるが、本来の並置混色は、色の構成要  
素の画角が小さく、それぞれは弁別できな  
い状態における混色のことである。たとえば、  
テレビのフルカラーの原理は、3種類(R・G  
・B)の小さな発光体の並置混色である。

このように、色の錯視の研究はまだまだ発  
展途上なので学問的に体系付けられるにはま  
だまだ時間がかかると思われる。きつとあな  
たにも新しい錯視を発見するチャンスはある。